

解説と鑑賞別冊

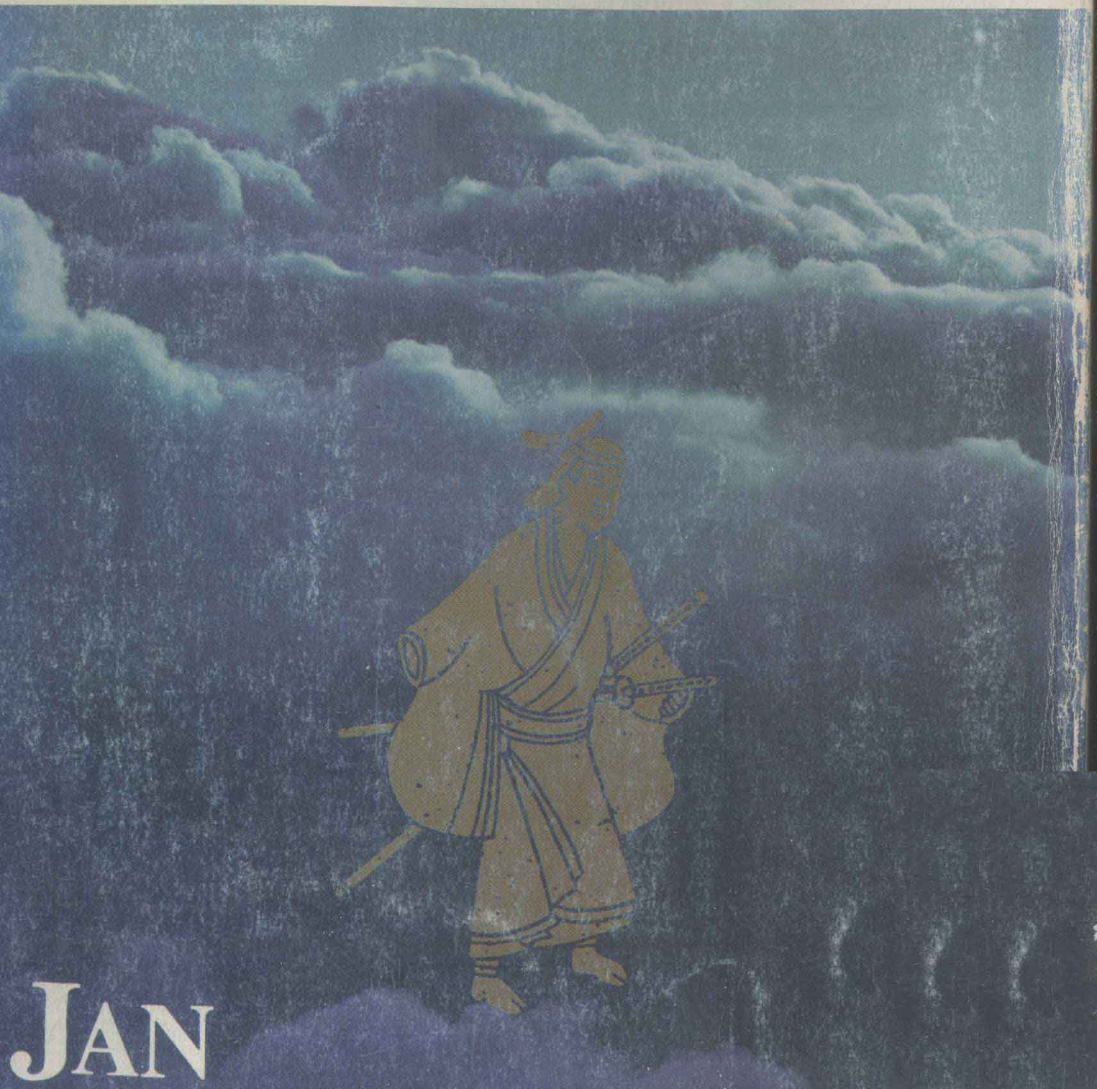
講座

日本文学

西鶴下

監修 市古貞次 編集 松田修・堤精二

昭和11年7月2日 第3種郵便物認可
昭和53年1月1日発行(隔月1日発行)



JAN

講座
日本文学



西鶴 下

執筆者紹介 (執筆順)

つつみ 堤	せい 精	じ 二	お茶の水女子大学教授
あさ 浅	の 野	あきら 晃	共立女子大学教授
は 長	せがわ 谷川	つよし 強	埼玉大学教養部教授
いぬい 乾	ひろ 裕	ゆき 幸	親和女子大学教授
ふ 富	じ 士	あき 昭	駒沢大学教授
つち 土	だ 田	まもる 衛	大阪女子大学教授
こ 小	いけ 池	まさ 正	東京学芸大学助教授
まえ 前	だ 田	よしみ 愛	立教大学助教授
や 矢	の 野	かず 和	共立短期大学講師

目次

西鶴下

講座日本文学

総論

堤 精 二…9

作家西鶴・実像へのアプローチ

浅野 晃…15

阿蘭陀西鶴 15

二十一歳で俳諧の点著となる

「好色一代男」の原初的発想

西鶴俳諧の現状を痛烈に非難

談林派の内部抗争

四千句独吟は自己宣伝

商業作家への道 20

「好色一代男」が世に出るに至った事情

演劇の実作をはじめ

小説的主題の発見と展開 25

書くことによって成長した西鶴

小説的な主題の発見

西鶴作品の多彩多様な展開と題材の拡散化の傾向
元禄女性を描いた二つの作品「好色五人女」と「好色一代女」
全国的な規模の情報収集網

人間観照の深化 31

西鶴作品における人間把握の基本的構造
善悪二道間の人間存在への関心
「日本永代蔵」における観照の深化
西鶴町人物の独自の文学的世界

晩年の西鶴 35

未完に終わった三つの作品
気概を失った西鶴の姿
落ちて着いた句風を見せる俳諧活動

同時代作家からの照射

長谷川

強…41

好色本の第一人者 41

「好色一代男」は好色本の始源的な位置を占める
西鶴と同時代の浮世草子作者との比較

先行の評判記・諸分秘伝書等と西鶴 44

西鶴の『遊女評判記』への関心

西鶴の各章と原拠作『色道大鏡』との比較
『好色二代男』は京都西村市郎右衛門の作か？

郭以外の好色風俗 57

『茶屋諸分調方記』の『二代男』への賛同
色茶屋遊びの風俗の『二代男』と他書との比較

『好色三代男』 62

西村本は伝統文学色の各残をとどめる

『好色三代男』に西鶴の影響を指摘できる

『三代男』には署名がない

西鶴への追隨の意味

西鶴における詩と散文

乾

裕

幸…
67

はじめに 67

西鶴における俳諧と浮世草子

『好色一代男』は奇妙きつな散文文学

〈俳言〉またはことばの下剋上 69

俳諧は和歌のはしくれ

たてまえ重視の觀念が人一倍強かつた西鶴

西鶴、ことばの解放を宣言

俳諧は雅と俗の二重構造をもつ

「笑」がことばを呑み尽す

寓言的な方法を基調とする談林俳諧

西鶴俳諧の散文文化

付合はコンテクストの取捨選択

〈俗源氏〉または俳家階梯 75

「二代男」は「源氏物語」のパロディーか

「俗源氏」の名づけ親は俳諧師

俳言の共有化は日常通俗言語の共有化を意味しない
後世の評価を撥ね返らせた「二代男」

連句文芸は加え算的な文芸

「二代男」は色道遍歴

〈転合書〉または襲の創造力 82

古典文学的意味と好色の意味

転合書とはなにか

激突と和解とを繰り返す緊張関係

俳文意識と連句的文体 88

浮世草子の俳文性と文体とのかかわり

和歌のレトリック

おわりに 96

西鶴は本質的には俳諧師

西鶴の文学性は遠心的・拡散的

西鶴の説話性

富士昭雄 98

西鶴の文学ははなしの文学

西鶴の説話性に関する研究成果 98

はなしの文学

はなしの伝統と西鶴

仮名草子の説話性と西鶴

作風の推移とその説話性

談理と説奇

西鶴の説話性からの離脱

寓言論にする創作意識の萌芽

説話より小説へ

説話性に関する他の成果

咄と物語——『諸国はなし』と『懐硯』との相違 107

咄と物語

『諸国はなし』の特性

『懐硯』の特性

『好色一代男』と業平説話 114

『二代男』と説話

『好色一代女』と笑話 118

『二代女』と笑話

おわりに 120

西鶴説話性の今後の課題

西鶴文学における

演劇と演劇的なるもの

土田衛 122

野間光辰氏の「西鶴五つの方法」

その年譜 122

西鶴の年譜を繙いてゆくと……

西鶴の演劇とのかかわり

劇界の人々との交流 125

西鶴の俳諧の場における役者への接近

談林俳諧師と役者たちとの多角的交流

『暦』と『凱陣八島』 130

浄瑠璃の処女作『暦』

西鶴作とみられる『凱陣八島』

『難波の白は伊勢の白粉』、『男色大鑑』と『嵐無常物語』 136

西鶴の歌舞伎界を素材とした作品群

『男色大鑑』巻五以下の役者若衆列伝

演劇的手法——『好色五人女』 144

西鶴の浮世草子の中にみられる演劇者の要素
最も演劇色が濃厚であると言われる「好色五人女」
謡曲「高砂」が原拠と考えられる「姿姫路清十郎物語」

西鶴文学の継承と断絶

小池 正胤…151

はじめに 151

文学作品の「継承と断絶」とはなにか

安永・天明期の西鶴 152

西鶴の作品に従おうとした秋成

西鶴と秋成の対比

西鶴から遠ざかる秋成

西鶴は平淡に秋成は複雑に

源内と西鶴との関係

西鶴的と見られる源内の作品

西鶴にあって源内にはないもの

文化・文政期の西鶴 163

西鶴受容の状況

平秩東作の「華野者談」

木村黙老の「国字小説通」「京撰戯作者」

喜多村信節の「嬉遊笑覧」

西鶴と黄表紙

西鶴と洒落本・滑稽本

西鶴の影響をうけた山東京伝

京伝の西鶴理解度は緻密である

西鶴と二九、柳亭種彦、山東京伝、滝沢馬琴

西鶴文学断絶の時代と風土

西鶴文学の復活

前田 愛……180

明治における西鶴受容のありよう

幸田露伴、内田魯庵の西鶴論

西鶴の非小説家説

坪内逍遙の「小説神髓」

西鶴は小説家であるより滑稽家の亜流である

西鶴作品における「意匠の統一」の欠如

演劇改良論と末松謙澄の「演劇改良会趣意書」

西鶴本発禁の経緯

淡島寒月の西鶴復興の機運

欧化主義にたいする硯友会の反撥

尾崎紅葉の出世作「色懺悔」

紅葉の西鶴文体の模倣

紅葉の「三人妻」

西鶴作品と紅葉の「大つごもり」

紅葉における大晦日の意味

参考文献

矢野 公和……196

総論

本巻は、作家西鶴を検討する論文一篇と、西鶴の文学作品にあらゆる角度から照明を当てた六篇の論文から構成されている。

西鶴の伝記を研究しようとする時、まず第一の難関はまとまった伝記的資料が皆無に近い状態であることである。わずかに、伊藤梅宇の『見聞談叢』中の記事が唯一といってよい存在であろう。そこで、西鶴の伝記的事実を説明する場合には、彼自身の作品——たとえば『誹諧独吟一日千句』のような——に主たる資料を仰がねばならない。野間光辰氏の『西鶴年譜考証』は、西鶴の伝記的資料を編年体に整理し、現在把握しうる最^もとも詳しく、かつ鮮明な西鶴像を追求する労作である。この資料の集成があつて、はじめて、わずかながらも作家西鶴へ肉迫する手懸りを得たことになる訳である。そして、西鶴像構築の今後の課題は、この断片的資料の集積をどう整理し、どのように読み解くかにある。浅野晃氏の冒頭論文「作家西鶴・実像へのアプローチ」は、この問題へ一つの視角を与えるものである。浅野氏は 1 阿蘭陀西鶴 2 商業作家への道 3 小説的テーマの発見と展開 4 人間観照の

眼 5 晩年の西鶴 と作家西鶴の生涯を五つの標目のもとに、それぞれの時期に分別し、西鶴の作家の成長の跡を検証しようと試みられている。資料的には、最近の森川昭氏の報告『延宝四年西鶴歳旦帳』が新たに加えられ、雑髪法鉢の時期が明確になるなど、西鶴伝記研究は徹々たるものではあるが確実な変化がある。浅野氏はこれらを基盤に立論されるが、とくに『好色一代男』と『好色二代男』がまったく立場を異にする出版であること、すなわち、『好色一代男』は自由な創作の場に立って作品を構想したものであるのに対して、『好色二代男』以下の作品は商業作家の道を歩まざるをえない状況での所産であることの指摘や、貞享元年という年に注目して、この年がひとり西鶴の新文学の発足であるにとどまらず、芭蕉にとっても、近松にとっても、自らの新しい世界の構築を始める重要な時期に当たっていると論述する点などに、西鶴像の塑造に多角的な配慮を示されている。

さて、一方西鶴の作品に関する研究領域は、戦後飛躍的な進歩発展を示した。古くは水谷不倒以来、戦前と一括される時代にあっても、多くの研究者の地道な努力は重ねられ、それなりの成果は収められた。しかし、何といても戦後の西鶴研究を隆盛に導いたのは『定本西鶴全集』の刊行と、森銃三氏の一連の西鶴研究の業績であろう。もちろん両者の持つ意味は異なる。昭和二十六年に『定本西鶴全集』の第一巻が出版されて以来、当初の予定より所収作品の数も増やしつ、最近、本巻にあたる十四巻の刊行を終え、事実上西鶴の全作品の完全翻刻を完成したことになる。尾崎紅葉・幸田露伴の帝国文庫本『西鶴全集』以来、戦前の西鶴の作品集というものが、伏字なしでは刊行できなかったことは、そのまま、その時代の西鶴に与えた評価といふことができようし、そのような基礎資料の中

での研究の進捗のままならないこともまた事実であったであろう。戦前に滝田貞治によって発刊された雑誌『西鶴研究』は、戦後間もなく吉田幸一氏によって継承されたが、この復刊された『西鶴研究』は、戦後の西鶴研究の隆盛にあずかって大いに力があつた。まず、多くの新資料を紹介し、これらは『定本西鶴全集』にすべて吸収されて行つた。また、森銃三氏の西鶴研究が学界に刺激を与えたのも、大部分はこの誌上でのことである。「西鶴作といわれている浮世草子が本当に西鶴作だろうか。」森氏の説を、とかく無批判に前人の研究成果を取り入れがちであった態度に対する警告と受け取りたい。また、当時も森氏の説に触発され、反発し、多くの研究が発表された。いわゆる西鶴作品の西鶴以外の手——あるいは助筆者を考へる時、西鶴の小説界での位置、また周辺作家の研究が要求されるであろう。長谷川強氏の「同時代作家からの照射」は、上述の意味から、視座を西鶴の周辺に据えて西鶴の作品の本質を追求しようとした論考である。

先行する仮名草子や遊女評判記と較べることにより、また山八やまやちや西村市郎右衛門等同時代作家の作品と西鶴作品との間に、どのような関りがあるかを検討することにより、さらには八文字舎本に西鶴がどのように利用されているかを吟味することによって、西鶴の特色を把握することが出来る。なぜなら、同時代の作品と較べて、西鶴の作品が他の追隨を許さぬほど隔絶しているかを見て、実は決して孤立する存在ではない。たとえば、彼が『好色一代男』等に先行遊女評判記の批判を述べていることは、西鶴がそれらを読んだこと、きわめて関心の深かったことを示す。当然、これらの投影が西鶴にあるはずである。先行評判記を批判しながら影響を受け、周辺の諸作品と異なる文学作品を創造

したところに西鶴の本質は露呈される。一口に西鶴の周辺といっても範囲は広い。長谷川論文では先行作品と西鶴の關係に焦点を絞って論は進められている。

長谷川氏の「同時代作家からの照射」が、西鶴の外側から見た作品論とするならば、乾裕幸氏の「西鶴における詩と散文」、富士昭雄氏の「西鶴文学の説話性」、土田衛氏の「西鶴文学における演劇と演劇的なるもの」の三篇は、内面からその構造を検討する論考である。

天和二年『好色一代男』の刊行により、文学史上西鶴の名は確固たるものとなった。彼の生涯にあっては、以後二十数篇の著述を続々と発表する浮世草子作家の時代に入る訳であるが、この時期にあつても、彼の俳諧師としての活動はなお続く。——いや、むしろ正確に言えば、相変らず俳諧師であつたのである。しかも、彼の浮世草子形成の基盤にあるものは、談林俳諧師としての修行中に獲得したものであり、浮世草子はその成果でしかない。現在のわれわれの眼には『好色一代男』以下の浮世草子の作品群が華々しく映る。だが、本来西鶴にとつてはどうであつたのか？ 乾裕幸氏の「西鶴における詩と散文」は、このような俳諧と浮世草子にまつる諸問題の解明を試みたものである。氏は「西鶴の俳諧と浮世草子は、それぞれの詩性と散文化性によってあきらかにジャンルを異にしなから、詩と散文がそうであるようなきびしい対立關係にはなく、俳諧をなかたちとして馴れ合うような關係にあつた」とされ、「西鶴における詩と散文」の關係を、俳諧と浮世草子のあいだに連続と断絶というかたちであらわれて来ると規定され、具体的に「俳言」の問題、古典と談林俳諧の問題、「転合書き」の意義付け、西鶴の浮世草子の文章等について丹念な論証を示されている。

あらためて説くまでもなく、西鶴の浮世草子は、すべて短編小説集である。その内側には、小説の新しい展開を模索していた明治の作家達をも魅了するような新鮮さを湛えながら、その実体は中世的な短編説話なのである。富士昭雄氏の「西鶴文学の説話性」はこの点を取り上げた論文である。氏は多くの先学の論を紹介しながら、咄と物語の差異を検討し『西鶴諸国はなし』から『懐硯』への展開を分析されている。

西鶴の作品の特徴の一つとして逸することのできないものに演劇の問題がある。従来、野間光辰氏の「西鶴五つの方法」や、浅野晃氏の「西鶴と浄瑠璃・歌舞伎」等の論文があるが、土田衛氏の「西鶴文学における演劇と演劇的なるもの」では、これらの論考を基礎として、まず、演劇と関連するところの西鶴年譜を整理し、延宝七年の『句箱』のもつ問題をはじめ、西鶴自身と演劇界の人々との交流について考察を加え、ついで『暦』『凱陣八島』等の彼自身の演劇作品について論じ、さらに『難波の舟は伊勢の白粉』等の演劇界を素材とした著作に及び、最後に西鶴の作品における演劇的手法について論述されている。

さて、西鶴が改めて見直されたのは明治二十年前後のことである。西鶴の再発見とさえいわれるが、しかば、西鶴の没後から明治に至る間、西鶴の文学はどのように享受され、継承されたのだろうか。この点に問題を求めたのが、小池正胤氏の「西鶴の継承と断絶」であり、当然のことながら、前田愛氏の「西鶴の復活」の前提となるべきものである。小池氏の論文では、とくに時代を文化文政期に限定し、京伝・種彦・馬琴ら戯作者達の作品や考証随筆類に彼らの西鶴把握の跡を追求され

ている。

西鶴に関する問題を整理し、解明しようとすれば、とても一、二冊の講座で解決がつくものではない。作家論・作品論に限定しても、ここに扱ったテーマは、その極一部分に過ぎない。しかし、これは西鶴とその作品を論ずる時、かならず經由しなければならない問題であり、所収諸論文は以上述べたごとく今後の西鶴研究の基礎となるべきものと確信するものである。今後多くの研究者によって、さらに展開されんことをねがってやまない。

最後に編集に時間を費し、各執筆者に御迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。たとえば、乾裕幸氏の「〈乞食〉の文脈——ことばの内なる芭蕉——」（『文学』岩波書店、昭52・5）で、本講座の「西鶴における詩と散文」を踏まえて立論されている部分を見た。この乾氏の場合は一例に過ぎないであろう。おそらく各執筆者に有形無形にわたって、種々御難儀をおかけしたことが多かったと思われる。ここに一言お詫び申し上げる次第である。

（堤 精 二）